

障害ある女性の声 国連に届け

伝えることが「差別なくす第一歩」

障害のある女性たちの声を国連に直接届けようと、市民団体が渡航費用の寄付を募っている。めざすのはスイスのジュネーブで開かれる女性差別撤廃委員会だ。障害者であり、女性であることで複合的な差別を受ける「生きにくさ」の現実を知ってもらいたいという思いがある。

寄付を呼びかけているのは、障害をもつ女性を中心に活動する「DPI女性障害者ネットワーク」（東京）だ。昨夏の事前作業部会に初めて視覚障害のある女性と介助者を派遣して「生

性の声」を伝え、手応えを感じた。そこで、2月中旬の

- 調査に寄せられた声
- ◆母の恋人に入浴介助をされ、胸などを触られた (30代、肢体不自由)
 - ◆「障害女性だから無理して働く必要はない」と周りに言われた (30代、聴覚障害)
 - ◆生理が始まった中学生の頃、母親から「生理はなくてもいいんじゃないの」と言われた。子宮を取るという意味だった (40代、肢体不自由)
 - ◆妊娠した時、医者と母親から墮胎を勧められた (40代、視覚障害・難病)
 - ◆義兄からセクシュアルハラスメントを受けたが誰にも言えない (50代、視覚障害)
 - ◆結婚に反対する義母に「家族に障害者はほしくない」と言われた (50代、肢体不自由)



渡航前の準備と現地での動きを話し合う「DPI女性障害者ネットワーク」のメンバーら＝東京都千代田区

見えぬ被害 性的暴力も

狙う。国連から日本政府への働きかけを促し、国内の状況を改善させていきたいという。

背景には、障害のある女性への深刻な差別がある。同ネットワークは2011年度に「障害のある女性の生きにくさに関する調査」を実施し、当事者の声を集めた。回答した87人のうち31人

市民団体、渡航費寄付募る

寄付の目標金額は185万円。同ネットワークの活動資金からも別途50万円を支出する。自費で渡航する人を除き、8人分の往復の飛行機代と宿泊費、翻訳などの資料作成費に充てる。食費や旅行保険などは派遣される人が自己負担するとい

障害者の人権問題に詳しい大阪市立大非常勤講師の松波めぐみさんは「障害のある女性が複合差別の実態を国連で伝えることは、国際的な注目を集めるだけでなく、当事者の力を引き出すことにもつながる。帰国後に各地で報告会などを開

が性的被害を経験しており、性暴力の訴えもあつた。介助や医療の場での被害が多く、なかなか声を上げられない実態が浮かび上がった。

渡航を予定している五位淵真美さん(37)は、脳性まひのため介助を受けながら暮らす。「障害のある女性への差別はなかなか表に出てこなかった。日本の現状を私たちの声で直接届けた。知ってもらおうことが差別をなくす第一歩になると思う」と話す。

いて問題が共有されることで、現状を変える力になっていくだろう」と話す。

寄付は、ネットで広く資金を集める「クラウドファンディング」という手法で2月11日まで募る。詳細は「ジャパンギビング」のサイト (<http://bit.ly/208Wm1D>) へ。出資者には寄付金額に応じてプロジェクト報告書の送付などの特典がある。ネット経由だけでなく、現金での寄付も受け付けている。問い合わせは「DPI女性障害者ネットワーク」(03・5282・3730)へ。

(見市紀世子)